

国内経済情勢

概観

景気抑制策の影響は金融面にしだいに現われつつあるが、経済実体面ではこれまでのところ目だった変化はうかがわれぬ。個人消費と設備投資を中心に総需要は根強い拡大を続けており、ここ一両月伸び悩んだ生産、出荷は再びかなりの増加を示した。商品市況は大勢堅調に推移し、卸売物価も上伸基調をたどっている。また消費者物価の騰勢もこのところ目だっている。

一方金融面では、銀行の融資態度は抑制方向に向かいつつあり、これに伴って企業の資金手当を早める動きもしだいに広がっている。ただ、企業の借入態度にはそれほど差し迫ったものはいわぬが、貸出金利も小幅の上昇にとどまっている。

9月の国際収支は、前月に引き続き総合で42百万ドルの黒字となった。輸出はゆるやかな回復歩調をたどり、輸入は高水準ながら先行き増勢鈍化のきざしもみられるが、季節性を考慮した貿易収支の黒字幅はいまださほどの改善を示すに至っていない。

生産、出荷の増勢は鈍化した**が、9月はかなりの増加**

鋳工業生産(季節調整済み)は、7、8月に伸び悩んだあと、9月は速報で+2.0%と相当な増加を示し、7～9月期の前期比伸び率は4～6月期

より鈍化しているものの、依然根強い上伸基調を維持している。当月の生産を財別にみると、一般資本財は、発送配電機器や風水力機械などの急減が響いて引き続き減少し、建設資材も減少したが、輸送機械(四輪自動車、鉄道車両)が大幅に増加し、また耐久消費財も相当の増加を示した。

一方、鋳工業出荷(季節調整済み)は、9月の速報で前月比+2.1%と生産とほぼ同じテンポの増勢を示した。当月の増加には輸送機械(四輪自動車、鋼船、鉄道車両)の著増が大きく響いていることはいぬが、反面、やや一時的とみられる要因がからんで減少したのものもあり、出荷の基調にはかなり根強いものがうかがわれる。

9月の生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、鉄鋼、繊維、民生用電機等の増加を中心に前月比+3.8%と徐々に相当の増加を示し、製品在庫率も106.7とやや上昇したが、その水準は低く、この面から生産の増加が抑制されるような状況にはない。一方原材料在庫は、7、8両月とも小幅の減少を示しているのに対し、販売業者在庫は7月までここ数か月増加を続けるなど区々の動きを示しているが、これら両在庫の在庫率はいずれも低めにとどまっている。

機械受注(海運を除く民需、季節調整済み)は、9月に期末の関係もあって減少したが、受注残高手持月数は、5月以降前回景気上昇期のピークを上回る高水準のままで横ばっており、また企業が資金調達面の制約から投資圧縮をはかることも当面予想されないため、先行き設備投資の増勢は多

少鈍るにしても、なおしばらくは根強い増加基調をたどるものと思われる。

この間、雇用面では、7月に有効求人数が有効求職数を上回るに至ったあとも求職倍率は低下傾向を続けており、労働力需給は引き締まり傾向を強めつつあるが、これが一部において生産の増大を制約する要因として働いている点は見のがせない。

消費者物価の騰勢目だつ

9月から10月にかけての商品市況をみると、繊維がスフ糸、人絹糸、生糸を中心に総じて上伸歩調をたどったのをはじめ、洋紙、基礎薬品類、砂糖等は強含みを続け、石油、セメント等も強保含いを示すなど、相変わらず底堅い動きを示す商品が目だち、商況の基調は依然堅調に推移している。もっとも、ごく最近、繊維が人絹糸を除いて小反落し、鉄鋼も軟弱な地合いを続けているほか、一部の業界では先行きに対する漠然とした警戒観が多少ともみられはじめている。

このような情勢を映じ、9月の本行卸売物価は前月比+0.5%と続騰し、10月上旬もさらに前旬比+0.7%とかなりの上昇を示した。ただ、中旬はこれまで値上がりの目だった木材、食料品が小反落したため、前旬比-0.1%の微落となったが、工業製品価格は保合っている。

一方、消費者物価(東京)は、8月に4ヵ月ぶりで反騰したあと、9月は食料品や衣料品の値上がりから前月比+2.4%と大幅な上昇を示し、10月も消費者米価の引上げなどが響いて、+1.5%と引き続きかなりの騰勢を示した。季節商品を除いても、9月+1.3%、10月+1.2%と相当の上昇が続いており、目先値上げを予想される品目が少なくないだけに、今後の動向は注目を要する。

銀行の融資態度は抑制方向に向かう

9月の銀行券は、月末が週末に当たった関係もあり、前年同月を上回る増発(本年439億円、前年21億円)となったが、他方、財政資金は米代金、交付金等の支払がかさんだうえ、外為会計も払超となり、また国債発行額が前年以下にとどまったため、月中払超額は1,415億円と前年(366億円)を大幅に上回った。

10月の銀行券は、月中430億円の増発と前年(437億円)を若干下回り、財政資金は、食管会計の支払進捗から前月に引き続き大幅な散超(本年3,103億円、前年941億円)となった。

以上のように、これまで前年を上回る揚超基調を続けてきた財政資金の動きはここ一両月顕著な変化を示しているが、これは租税、郵便貯金の好伸にもかかわらず、食管会計の支払が豊作や米価の引上げにより目だって増大していることが大きく響いている。

この結果、9、10両月とも市場の余剰資金は多額に上ったが、本行は、政府短期証券の売却などにより抑制的な態度で調整したこともあり、金融市場は例年のような季節的引きゆるみを示さず、9月1日に各条件物とも1厘上昇したコール・レートは、その後保合のまま推移している。

一方、銀行券月中平均発行高の前年同月比増加率は、9月に+16.1%とここ一両月の水準をいくぶん下回ったが、10月には、再び+17.0%と上昇した。このように銀行券がかなりの高水準を続け、また全国百貨店の売上高が目だって好伸していることなどから推して、個人消費は相当な増勢を持続しているものとみられ、とくに農家所得の増大を背景に、農村の消費がこのところ堅調の度合いを加えているようである。

都市銀行等に対する貸出増加額規制の実施に伴って、銀行の融資態度は抑制方向に向かいつつある。9月の全国銀行貸出増加額は、月中4,508億円と前年同月を9%下回った。業態別には、都市銀行が前年比かなりの減少となったほか、地方銀行、長期信用銀行も微増程度にとどまった。なお、全国銀行信託勘定の貸出は相変わらず著増を続け、中小企業金融機関の貸出も総じてなお根強い増加を示している。

銀行の融資態度が抑制方向に向かうにつれ、企業では先行きをおもんばかって、早めに資金手当を急ぎ、あるいは信託銀行、保険会社などから借入予約をとりつけようとする動きも若干目だちはじめており、また起債意欲も徐々に高まっている。ただ、企業の借入態度にはいまださほど差し迫ったものはないが、このため、9月の全国銀行貸出約定平均金利は反騰したものの、上昇幅は比較的小幅にとどまっている。

公社債市況は、依然軟弱な地合いを改めていないが、8月から9月にかけて相当な値下がりを示したあとだけに、このところ軟化の度合いはやや弱まっている。なお、国債相場は9月以降保合っているが、需給の実勢は引き続き不景気に推移している。

輸出は回復に向かうも輸入は依然高水準

9月の国際収支は、貿易収支が黒字幅をやや拡大したうえ、短期資本も流入超を続けたため、総合収支では42百万ドルの受超とほぼ前月並みの黒字を持続した。なお、金融勘定では、為替銀行の

短期資産・負債バランスは小幅の好転を示し、外貨準備は4ヵ月ぶりに増加した。

しかし、貿易収支の黒字幅を季節調整してみると、前月よりかなり増大してはいるものの、4～6月の平均水準にもどった程度で、貿易外収支や長期資本収支の大幅赤字を補うにはなおほど遠い状態にあり、貿易収支のみを季節調整した基礎収支じりでは78百万ドルの赤字と依然大幅な逆調傾向が続いている。

9月の輸出は、前年同月比で+8%の増加となり、季節調整後の実勢でもかなり水準を高めた。商品別(通関ベース)には、相変わらず綿・合繊織物が不振を示している反面、自動車、船舶、ラジオ等を中心に機械類が好調を続け、鉄鋼も引き続き回復気配を示している。輸出信用状の動きをみると、9、10月とも、アジア諸国向けが伸び悩みを示しているなど問題なしとしないが、大勢として改善の方向にあり、また、商社の成約も持ち直す動きをみせているため、今後、輸出はゆるやかな回復歩調をたどるものとみられる。

一方、9月の輸入は、前年同月比+24%の高水準となり、季節調整後も根強い増勢を示している。品目別(通関ベース)には羊毛、大豆のほか、食料品の一部が減勢を示したが、石油、木材、鉄鋼くず等を中心に原燃料の伸びには依然衰えがみられず、機械類や化学製品も増加基調にある。ただ先行指標面では、9月以降輸入承認、輸入信用状とも伸び悩み、増勢鈍化の気配もうかがわれる。(昭和42年11月7日)